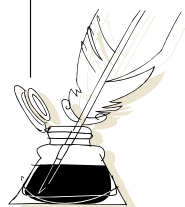


## 人生讃歌

## 給料日



わが二十一歳ころは夢と現実の狭間<sup>はざま</sup>で憂鬱<sup>ゆううつ</sup>な記憶が多いが、そのなかで楽しかったのは同人誌の仲間といい酒を飲んだり、いい本を読んだりだったが、その中の二つに給料日がある。ぼくは五歳ころから家の農作業を手伝ってきた。働くより遊ぶほうがずっと好きだったが、父母や兄が畑仕事や馬での丸太運びでおカネを稼ぐのを見ていたし、どこでおぼえたのか「働かざるもの食うべからず」という言葉も耳の底にしみついていたので、食べるには力仕事をしなければならぬと思いついていたのである。十八歳から六十七歳まで北海道新聞社に勤め、五十年近く一日八時間働きながら小説を書いてきたが、体を動かして働くのは少しも苦にならなかった。

★

ともあれ会社勤めでは給料日が一番うれしかった。ぼくが二十一歳ころはまだ給料は現金支給で、上司から部員めいめいにおカネの入った紙袋を手渡されるのである。ま、安月給のぼくは袋に入ってくる額の少なさはわかっていて、その使いみちも決まっているのに給料日が待ち遠しかった。給料袋の封を切るときの何とも言えない独特の期待感がたまらなかった。思っているより多く入っているかもしれない、という希望も少

しあったが、もちろんそんなことがあるわけがなかった。

当時ぼくの会社の給料はヵ月に四回に分けて現金を手渡された。ぼくは手取りで二万円くらいだったので、それをその月の五日に千円ほど、十五日に千五百円ほど、二十八日に六千円、三十一日に千五百円くらい支給された。どうして四回にも分けるのか、会社のおカネのやりくりが大変なのか、まったくわからなかったが、ぼくは使い方に苦労した。街の食堂で食べるカレーライスが六十円だった。二十八日にもらう六千円は、そっくり下宿代を払ってなくなった。

あと三回でもらう四千円で、欲しい本を買って大学の通信教育費を払い、路面電車の定期券代を払うと、ほとんど残らなかった。会社での昼食代はツケにし、着る下着も買えなかった。靴下は二足しかないのを洗わないで毎日かわるがわる履くため、やがて足の汗と脂<sup>あぶら</sup>で固まり、脱ぐと履いていたときの足の形そのまま立体的に立つのであった。

それでも給料日には、気持ちが浮き立った。飲み屋へ行くことである。ツケのある二軒の居酒屋へ支払いに行き、もし千円のツケがあれば三百円だけ払い、その日もまたツケでたっぷり飲んでくるのである。楽しかった。酒場の店主もツケがきれいになるのをいやがったし、ぼくもツケがあるのが自慢だった。したがってツケがきれいになることはないのであった。

★

ところが、あるときから給料が二十五日にまとめて一回で支給されるようになり、ぼくは困った。いままでも常におカネがなくて閉口<sup>ひきこう</sup>しているとき月に四回、小ゼエでも入ってきて助かったが、一回支給では次の給料までが長く、非常に苦しいのであった。

二十五日の給料日には会社へたくさんの女性 came。酒場のツケの集金だった。和服の人、普段着に前掛けの人、化粧を

していない人、髪を引<sup>ひ</sup>詰<sup>め</sup>にした人と、彼女たちの店では違<sup>ちが</sup>う姿や素顔<sup>すがお</sup>を見ることができて、ぼくは面白<sup>おもしろ</sup>かった。たまに赤ん坊を背負<sup>お</sup>つてくる女性もいた。彼女たちはみな会社の守衛と顔なじみで、玄関で軽く会釈するだけで社内へ入<sup>い</sup>つてきた。われわれが給料袋を手にする午後四時、社内の廊下に女性の列ができたのだ。酒場と職場の境<sup>きま</sup>いめがなかった。

ぼくの職場でも彼女らを迎える態勢をととのえていた。ぼくがツケている店の二人もくるので、更衣室か屋上へ逃げる用意をしていた。集金にくる一人のトモコさんは、ぼくが流しのギター弾きに歌<sup>うた</sup>ってもらおうおカネがないとき、百円を二回貸し



挿絵/中江潤一

てもらったママで、彼女には次の店へ飲みに行くおカネまで借りたこともあるのだ。しかし今日、払<sup>は</sup>うおカネがないので姿をくらまそうと思<sup>おも</sup>っていたのだ。ところが職場の先輩がぼくの手<sup>て</sup>に小さい茶封筒を押しつけ「トモコが来た<sup>きた</sup>ら、これで勘弁<sup>かんべん</sup>してくれ<sup>て</sup>渡<sup>わた</sup>してくれ」と言<sup>い</sup>って、どこかへ行<sup>い</sup>ってしまった。それを見た別の先輩が、やはりぼくに少しだけの払いをあずけていなくなった。それでぼくは逃げる機会を失<sup>う</sup>い、間もなく現れたトモコさんに二人の先輩のツケを渡したあと、仕方なくぼくも自分のツケを少し払<sup>は</sup>うはめになったのだ。ぼくにはとんだ災難<sup>さいなん</sup>だった。トモコさんはニコツと笑<sup>わら</sup>い「お手洗い混<sup>こ</sup>んでるでしよ<sup>う</sup>ね。みなさんによろしく」と言<sup>い</sup>って去<sup>さ</sup>って行<sup>い</sup>った。こうして給料日の職場は、たくさん<sup>お</sup>の女性でにぎわって華麗な雰囲気であつた。一瞬、ここは酒場か、と思うほどなごやかな光景であつた。

★

あるとき突然、給料が現金支給でなく、銀行振り込みになつて仰天<sup>おうえん</sup>した。給料袋には紙片が一枚入<sup>い</sup>っているだけだった。初めてその薄<sup>うす</sup>っぺらい紙袋を手にしたとき、ぼくは体の底に氣<sup>き</sup>だるい喪失感をおぼえた。なんと言<sup>い</sup>おうか、働<sup>はたら</sup>いたのに報酬<sup>ほうじゆ</sup>をもえなかつたような、殺風景な氣分が一瞬、体の中を通り抜けて行<sup>い</sup>った。勤<sup>しん</sup>めてから、たぶん五百回くらいも現金が入<sup>い</sup>った紙袋を手にした反動の氣持ちに違<sup>ちが</sup>い<sup>な</sup>かつた。衝撃<sup>しんげき</sup>だった。

★

だが、二月月たつと給料日に紙切れ一枚もらうことに慣<sup>な</sup>れ、長いこと続<sup>つづ</sup>いた給料日の高揚と感動が消滅<sup>しょうめつ</sup>して<sup>い</sup>た。ぼくの、この順応<sup>じゆんおん</sup>のよさが情けない。なによりも給料日に現金が出<sup>で</sup>なくなつてから、酒場の女性が列をなしてこなくなつたのが一番さびしかった。たしかに、あそこには庶民の文化と人生があつた。①